

図書館による情報リテラシー教育支援

- 総合科目授業支援レポート -

「情報メディアとネットワークの活用」と題した授業が平成12年度前期の教養科目（総合科目）に開講されました。附属図書館と総合情報処理センター（以下、「センター」という）の協力によるものです。開講に至った経緯、成果などについて、この授業の企画と演習支援にあたった図書館の立場から報告します。

<開講に向けて>

近年、学術情報メディアの電子化とネットワーク環境の進展はめざましく、大学図書館にとって、情報アクセス環境の整備と並んで利用者自らがパソコンを使いこなすネットワーク上の各種情報を収集し活用する技術（情報リテラシー）の教育が大変重要な機能になっています。

附属図書館では、平成11年からその課題に本格的に取り組み、4月に実施している「新入生ガイダンス」でコンピュータによる目録検索(OPAC)や雑誌記事の利用方法などについて紹介し、さらに秋に行っている「中級ガイダンス」で、レポートや卒業論文のための情報収集方法の指導などもプログラムとして取り入れるようにしました。

一方、京都大学をはじめとしていくつかの大学において、数年前から文献の収集と活用をテーマとした授業を図書館員が支援する形で実施しています。これは平成8年7月29日に学術審議会が公表した「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について（建議）」において、図書館による情報リテラシー教育への支援が求められたことが背景になっているものと考えられます。

本学でも、情報リテラシー教育の授業はいくつか開講されていますが、学術文献（情報）の収集やその活用に重点を置いたものはみられません。附属図書館では、今回、総合科目にこのような授業が開講されることは、学生の自己学習と情報活用の場としての図書館利用をさらに促進し、熊本大学が高度な

平山忠一・図書館授業支援スタッフ

教育研究を遂行していくための情報基盤として図書館（機能）を強化するチャンスであると考え、全面的に支援することになりました。

<授業の概要>

授業の目標は次のように設定されました。

- ・大学図書館や情報メディアに親しむことで、自ら学び新たな知的創造を可能とする。
- ・文系・理系を問わず広く卒業研究やレポート作成に必要な知識を身につける。
- ・情報化が進展する実社会でも役立つ実践的知識の習得。

講義では、多様化した各種メディアの特質とそこに含まれる情報の生産および流通プロセス等を概観し、その上でネットワークを利用した情報収集とその活用法やインターネット上における情報倫理などについて学ぶものとしました。演習では、学術情報を始めとする各種情報の検索実習を通じて、講義内容を確認するとともに多様な情報資源へのアクセス方法を習得することにしました。授業の全体構成はおおまかに、各種メディアの特徴と検索入門、ネットワークを利用した情報収集・レポート作成、インターネット利用上の情報倫理となっています。

<実施>

授業の性格上、情報機器等の利用は必須条件です。そこで、教室は原則としてセンターを使用することにし、参考資料の解説・実習などは中央図書館で実施することにしました。このため、センター端末室の端末台数（一室70台）に合わせた受講者制限を行うようにしました。最終的には受講希望者が90名を超えたため、文系の新生を優先して70名を選抜しました。

多くの受講生に対して演習を効果的に行うためには支援体制が重要です。オーガナイザー及び分担教官（計6名）の外に、図書館から、授業・演習サポーター4

名、実習7名、TA4名、それらを調整するコーディネータ1名が参加しました。さらにTA4名を加え、全体で13名の支援体制が組まれました。また、講師と受講生との双方向性をもった授業を実施することもこの授業の目標のひとつであると考え、授業用のホームページ(*)を設置しました。教官と図書館スタッフの連携のもとでシラバス、テキスト、講師HPへのリンク、授業の参考書情報、受講生からの質問、レポート等を公開しました。

<受講生の評価>

各回の授業終了後及び最終回にアンケート（授業評価）を実施しました。紙数の関係で特徴的な点のみあげておきます。

- ・受講の動機について、78.7%が「シラバスをみて今後役立つ内容だ」と思ったとし、86.9%が「パソコンを使いこなせるようになる」ことを期待していた。
- ・受講後の感想では、50.8%が「受講していない人に対して差がついた」と考え、67.2%が「卒業論文などで役立つ」と思ったと回答。
- ・演習のサポート（人数、対応の親切さ、的確さ）については、肯定的な評価が多く、「親切さ」では73.8%が「良い」と回答。
- ・授業のホームページについては、「見ていた」とする回答は44.3%にとどまり、レポートをホームページに掲載することについて、「良い」とするものが29.5%、「嫌だ」とするものが31.1%あった。また、「他の授業でも情報公開して欲しい」が27.9%あった。
- ・パソコン所持については、「自分のパソコンを持っている」が57.4%で、さらに「持っていない」のうち「購入予定がある」が88.5%あった（購入するつもりなし→3人）。
- ・図書館の利用に関しては、「データベースや参考図書を使って調べるようになった」が58.3%、「利用する機会が多くなった」が45.8%あった。

<課題>

図書館からみた最大の課題は「施設・設備（資料を含む）」の問題です。参考図書や館内のパソコンが足りなくて授業で取りあげた課題（問題）を十分に調べることができない状況もありました。また、館

内で70名の授業を実施する部屋がなく、狭い部屋で気分が悪くなった学生も出ました。今回の授業を通じて、中央図書館の設備の貧弱さを痛感させられました。

この授業の受講生は70名ですから、新入生の一部が受講したに過ぎません。したがって今後は、図書館ガイダンスの充実もますます重要になります。また、それとは別に「通常の授業」のなかで教官と図書館が連携し、それぞれの専門や学習の状況に応じた情報（コンテンツ）の収集や活用、留意点などについても身につける機会をつくる必要があります。そのためには、全学レベルでの情報リテラシー教育に関する議論のなかで、図書館の役割もきちんと位置づけられなければなりません。

<おわりに>

今回の「授業支援」の取り組みは、これまでの図書館サービスの殻を破る画期的なものであったと思われる。理由のひとつは、図書館の業務を行う上で、これほど主体的かつ直接的に「授業」を意識したことは、これまでにはほとんど無かったからです。多くの大学図書館における蔵書構成やカウンターサービスなどの実態をみれば、学習の柱である「授業」と連携したものになっているとは言い難いと思われます。学生が授業で出された宿題を調べに来ても図書館には所蔵していないケースはどこの図書館でもよく見られる光景です。「授業と連携した図書館サービス」の重要性が確認され、今後の展開への第一歩として、大変意義があったといえます。

最後に、授業支援スタッフのTA（院生）の一人の感想を紹介しておきたいと思います。

「・・・今回、このような形式での講義は初めての試みということでしたが、図書館スタッフの方々の熱心な準備（資料、リハーサル等）や、学生に対する丁寧な説明が非常に印象的でした・・・」

(*)<http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/sogo2000/>

（ひらやま ちゅういち 附属図書館長）

図書館授業支援スタッフ：

川内野祐子、浜崎千雅、中尾康朗
伊波ひとみ、梅尾勝征、浦田博臣
牛島直史、森下和博、浜崎修一